

本宗諸祖と法式

——特に声明を中心として——

福庭豊春

(一)

法式は種々の部門から構成せられてゐるもので、威儀、健稚、執持、音調等がその一例であるが、その中でも重要な役割をなすものは音調である。如何なる法式と言う儀式に於ける規定を見ても常に多数の要句、偈文を經文中より摘出して、音声と語調によつて誦出し、唱和する事が最も必要で、又それによつて自己の信仰を表現し法悦の境地を味得し、仏徳を讃歎し、回向の意義を成就するものである。その仏教儀式に應用する音声を總じて声明と言う。

声明とは印度に於いては既に五明の隨一として盛んに研究されてゐて、その外一般に言語又は文字の學で專ら語法、訓詁學を論究する學から端を発してゐる。元來声明とは即ち仏教儀式に用ゐる古典的な音声樂で經典、仏名、偈頌を誦誦する時、高下抑揚を付して唱へるもので、總じて梵唄と稱するものである。何れにしても聲を中心とするものであつて、日常我々が聲を離れる事が出来ないと同様、仏教も又聲を離れる事が出来ないものであり、信仰も亦聲を離れる事は出来ないのである。信仰から流出する感謝の聲は即ち、此声明でなければならぬ。その声明は即ち仏前に於いて微妙の音声を以つて仏徳を讃歎する歌唄であると共に又、声明は肉声歌唄であるが故に、その呼吸と発聲の關係、律呂、高低、浮沈、強弱、調子等のむづかし

いさまりがあるのである。更にこの音声の運行を定めたる節譜の研究、及び實際の歌唄法式はその宗々によりてその趣きを異にし、是れを比較研究し、長を採り短を捨て、益々發達せしむることも一朝一夕のことではないが、然も此れを越せにすることは決して出来ないものである。更に此れを歴史的に印度支那日本と三國流伝の経路、梵唄、漢唄、和讃の研究、顯密兩教の相違等の比較研究等中々容易な業ではない。今は唯限らるる紙数に於いて、かくも法式の重要性を帶ぶ声明に対し、本宗諸祖が如何なる態度であつたかの端をたどつて見たい。

(二)

支那の声明が魏の武帝の十四王子と伝える陳思王曹植によつて大成せられた事は周知のこと、彼が魚山に遊んで勿ち空中に梵天の響を聞いて、自らその秘曲を感得し、然も此れを後世に流傳すべく梵唄の譜曲所謂「博士」を創製して支那声明遍の大成をなしたと云ふ。即ちその消息を古今仏道論衡甲（大正藏經五二・三六五、下）に

陳思王曹植。字子建。魏武帝十四王子也。母流涕經。輒流連呢嘔。只爲至道之哀極也。遂裂軋絃と声昇曲折之響。世之訃誦咸應章焉。（中路）皆遊魚山忽聞空中梵天之響。清腸哀婉其声動心。独聽良久。而待御莫聞。植深感神理。弥悟法應。乃慕其声節。字爲梵唄撰文製音。位爲後式。梵声老頭始於此焉。其所伝唄凡六契云々

と述べているは、印度僧からの秘伝を授かつたと見て、差支えなからうと思う。然るに六朝時代に入つて佛典講究熱が盛んとなり、その研究者の思想内容の異りから同一研

呪香の集面が組織せらるゝに至つたものであり、こゝに教会儀式の創説を認るに至つたのである。その教会儀式の中最も盛んに行われ、又後世まで吾々がその感化を蒙つてゐるものは六時礼懺の行法である、その原は大智度論五五に

佛常ニ一日一夜六時ニ以テ仏眼ヲ覓メ衆生

と言ひ、十住毘婆沙論六（大正藏至二六・四七）にも

是事應テ初夜一時礼ニ一切仏ヲ懺悔勸請隨喜廻向ト中夜後夜皆亦如是於ニ日初分日中分

日没分亦如レ是一日一夜合メ爲ニ六時一心思ニ念ニ諸仏ヲ如ニ現在ニ前

と説く。こゝ何れも晝三時、夜三時、即ち十住論の初夜、中夜、後夜、及び日の初分、中分

後分の六時に修行する事が、印度の習わしで、彼の南海寄歸伝四（大正藏至五四）に

夫礼敬之儀教ニ有リ明則ニ自可ニ六時兼念四体廻動ス

と言つてゐるを見てもこゝれを知り得る事が出来る。

而も音韻学が次第に発達する段階に於て、南北朝に入つて、曇遷、僧辨等に於つて盛んに研究され、法琳、曇輔、曇進等の數十人の音韻通達書を出し、終に隋唐時代は楊炯、詩叟の最も盛んに流行する事となり、加うるに支那音楽と梵樂法と調和し、雅樂最も発達し自然仏教音楽もこゝれと和して、次第に盛んとなり、仏教儀式に是れを取り入れ、こゝに讃嘆最も隆盛を極むるに至つた。彼の亥琮が教経法式十卷を著し、諸經典の法式を制定せしを見ても察知せらるゝ如くこの方面に対して全く無関心であつたかは、どうして言い得ようか、印度、中国の諸師の足跡を次にふれ見て見る。

(三)

遠く印度に於ては紀元二世紀頃の出世と言われている馬鳴（惠台達戒著、仏教文化史一六）は、その性文学を好み亦頗る音楽に秀で、轉水和受と名付く伎楽を作り、自ら此曲を奏し以て人に苦空、無常、無我の理を教え、爲に城中五百の王子が此曲を聞き出家したと伝へるは、音楽の大能を有せられし事を示すものである。惜むらくはその善述に頌讃の形式なき事である。迦樹はその善十住毘婆沙論六の諸偈、特に易行品の八偈の如き悉く讃頌の形式をとり、中でも十二礼に至つては初めに「至心歸命礼西方阿弥陀佛」と云い、一偈毎に「願共諸衆生往生安樂国」と、まったく礼讃の形式をとっている。指導大師は此曲を中夜礼讃に引用し、更に五念門にも此曲を引き、胎教衆に於ても、又天台、真宗等に於いても五念門と称し、或は十二礼と称して重立った法要には必ず此曲を用いている事は、如何にこの礼讃が仏教讃歎に重要視せられたかを知らる事が出来る。

天親（仏教尊義ハハ）は無量壽経優婆塞戒合體生偈（淨全一・一九二）に「世尊我一心しの偈文を挙げ「無量壽佛多羅華句我以三偈讚之」總説と竟々しと結んで居り、直接敬敬の處に非ずと善光寺、後夜礼讃に指導大師が引用している處から見れば何等共通性を見る事が出来よう。支那の慧遠（仏教尊義一ニ九）は主に念仏修行の實踐により西方往生を願う思想であり、念仏三昧の行法が根本であるが、やがては指導大師の般舟三昧の行法尤の手引きであり、やはり此曲によつて常行三昧の法式とせられた處から見て、そこに大いなる共有性を見出すことが出来る。

曇鸞（淨全一・二〇九）には讚阿彌陀仏偈があり、「南無至心歸命礼西方阿弥陀仏」と偈の

終りに、「願共諸衆生往生安樂國」と四十九回繰返されて、然も最初に六字名号末尾に觀音勢至大海衆の文三回、懺悔文一回と全く礼懺の形式を有されてゐる、

道碑は安樂集に讃阿弥陀仏偈を引用してゐるはやはりこれに倣じたものらしい、善導に至つては、往生礼讃、般舟讚、法華讚を用いられたは明かであり、往生礼讃へ淨全四・三五四に

護^テ依^ニ大經及^ビ普賢天親此^ノ土^ノ沙門等^ノ所造^ノ往生礼讃^ニ集^ニ在^ニ一^ニ分^ニ作^ニ六^ニ時^ニ唯^ニ依^ニ相續係心^ノ助^ニ以^テ往益^ヲ亦^ニ續^ニ曉^ニ悟^ニ未^ニ聞^ニ遠^ニ活^ニ數^ニ代^ニ耳

と勤修すべき所以を示し、礼讃私記卷上へ淨全四・三九二に、「作^ニ如來嘆^ニと説明するはこれ梵唄を誦する事での如來嘆とは、如來妙色身の文を声明で誦する事を示すものであるから、明かに一種の曲調を以つて讃唱せられたものであると想像して苦しからぬ所である、

法照は法五会法事儀讚、略五会法事讚などに音曲をつけてこれを教つたもので、これ五会とは大經の「清風時発出^ニ五音声^ニ微妙宮音自然相和^シに順じたもの」と言ひ、

天台に至りては嚴澄を桓武天皇が入啓還京生として天台山に向わしめ醍醐の後、四種三昧の行法を弘め三部の長誦会式を撰述して語り、慈覺大師は仁明天皇の承和五年入唐歸密の學を研精し、醍醐の後五台山念仏の法を取山に移して、常行三昧の念仏を修行へ入唐求法巡礼に記^ニ・念^ニ念^ニ念^ニしたし、その他、入唐醍醐の多くの君は声明をも身につけて、我國に販り、其後次第に類函の行法の中に声明が取り入れられて修行される様になつて来た。

(四)

元祖大師一世八十年、專ら念佛を以つて行とせら小晝夜に餘行事なき事は、諸種の伝記の上

に明かなる事であるが、元来比叡山に育てられし方であるから天台声明に倣ひていたと想像して苦しからぬ歟で、勅修御伝へ浄土宗聖典ハ〇六以下勅伝と云う）

上人礼盤にのほりて啓白、其後錫杖を誦し鐵法をばじめたまう。（中略）後夜の誦声は上人晨朝の誦声は法皇、御つこめあり、

と後白河法皇の御発願で河東押小路の仙洞で、御法經を修せられし時御発達なされし時の記を見ても知られる如くその「啓白」錫杖しは基は天台声明であり、更に「誦声は上人」とあるは、その誦声は今で言う声明師の首座を意味するものであり、余程斯道に上達したものに非ざるべからざる重い役目である所から見ても、元祖は如何に御堪能であつたを知る事が出来る。又同卷以下享祚の段に、「法皇親しく伽陀を誦し給ひ、上人入道相国同じく助音申さる」の文、又同十卷へ浄土宗聖典ハ一二には、元祖自ら天台宗の如法經次第に準じて、浄土三部經書写の次序を定められたり

次に無言行道三返奉請合致節の如し

次に諸家宝座の前に列立して惣礼の伽陀を誦すべし、其詞に云々

として、伽陀の文を定められ、差足を作られるなどは容易に凡人の爲すべき処でなく次下、

次に仏經を讀誦すべし伽陀其詞先の如し（中略）前白以後は惣礼の伽陀を誦すべし。次に例時作法は如常

とある内、その例時作法は、引声の阿弥陀經であつて、其の他伽陀、惣礼の偈合經等は當時の天台宗の僧侶がすべて修行していた日常の勤行式であつて、元祖も元より天台の僧侶として、やうした修行をされた事に基づくものと考えられるにしても、如何に天台の声明を身に付けて

いられたかを知る事が出来よう。

八坂の引導寺に於て七日間の別時念仏を修せられた時、心阿弥陀仏調声し住蓮女衆冠仏等助音して六時礼讃を唱えられたとして、その終り勅伝十（浄土宗聖典八一ニ）に

こ此六時礼讃苦行のはじめなり

と言われているが、六時礼讃を行ずる別時に於ての始めであるにしても、彼の如法經次第にも礼讃を加えられて居り、それ以後の法要に用いるを如常とされてゐる所より見て、確かに声明を以て儀式の中心とされた元祖の思想を知る事が出来る。

二祖三祖以後七祖までは法式らしいものの定法は悉くなかつたものと述べれる。然し二祖上人が自己の日常の行業として元祖大師と同様の足跡を踏んだ事は明かな事実で勅伝四十（浄土宗聖典一一二〇）に

毎日に大卷の阿弥陀經六時の礼讃時をたかへず又六万遍の林名おこたることなし

と聖老上人伝（浄土宗全書十七、三九二）の同じ記述などの裏から推して、元祖と大卷は同様の事であるが特に二祖には二祖独特の別時行業がある。

三祖には元祖二祖と表裏ない裏が多いにしても三祖にも特有の行法が存してゐる、それは法華讀經行道式である、然阿上人伝（浄全十七、四一〇）に阿弥陀經、六時礼讃、名号の不衰を明しての後

又月月行法華讀一節節勤別時念仏一其作業篤謹実有り由哉

がこれである。然し二祖三祖共その当時に本宗流の声明を以て組織したる法式の可なり盛んに行われていた事を想わしめるものであり、當時の重立つた儀式には天台の声明や本宗の礼讃

并を用いられたものであると察して懸念のない様である、然し二祖三祖も亦相違斯道に熟達せられて居られたものと想像するものである、かゝる方面にも苦勞せられた事を思ふ時、更に我等末輩共は慚愧に堪えない次第である、

(五)

吾等僧侶は儀式には莊重美を加える事が大切であるが、その美を加える事、即ち二祖によらねばならない事は言うまでもない事である、元祖は声の衆聲明によつて一般民衆を把握された奥から推してこの聲明が宗教宣布上特に法式に重要なる役割を演じているを知る時、宗教を生かす原動力たる聲明を、我等愚僧は今少し身につけておく必要がある、

以上

尚紀事に当り六時礼讃の円大經東方諸仏圓傷である初夜礼讃の一時を探求する考えで準備を進めたのであるが、資料不足と短日救の爲その功を返る事が出来ず、同輩生の御期待にやう事の出来なかつた事をお詫びする、尚うなれば資料を大いであるであらう。思い廻りの為に

（研究聖賢四回生）